

大学時代の体育会活動と就職後のプロアクティブ行動との関係 —体育会系の「系」からの離脱モデル—

Relationship between athletic club activities in university days and proactive behavior after starting working:
Model of withdrawing from “hierarchical system” of athletic clubs

金 森 史 枝*

蛭 田 秀 一**

Nobue KANAMORI*

Shuichi HIRUTA**

The purpose of the study was to clarify what kind of impacts athletic club activities in university days have on job hunting and early stage career development around the 3rd year of employment through qualitative analysis, laying the concept of proactive as an analysis framework. The study interviewed Mr. A in the 3rd year of employment who belonged to an athletic club in his university days and started working after graduating from the first stage of the doctoral program. The interview revealed that Mr. A first found significance in having aspiration from his successful experience of getting into the college he had wanted to go after preparing for the entrance examination after failure in his first trial. So, he joined a triathlon club, which is one of athletic clubs, and proactively addressed organizational reform of the club and formed an organization which had not been established yet. Next, he worked on job hunting at his own responsibility and selected and joined a company in which he can utilize his specialized knowledge. After joining the company, he was assigned to the desired department where his strengths such as aggressiveness and leadership were highly evaluated in character evaluation. Furthermore, he is participating in corporate sports activities, deepening friendship with colleagues, and is positively involved in social contribution activities of the company. In this way, he is now living a fulfilling working life in the 3rd year of employment. As mentioned above, Mr. A has been selecting his behavior without shifting his principle “proactively behaving” and has been able to concretely demonstrate “proactive behavior”, that is, behavior by an individual of being actively engaged with an organization. Therefore, the hypothesis “students who are proactively participating in athletic club activities in university days enrich their university lives and aggressively conduct proactive behavior after starting working” has been validated. In addition, this study has proposed that the value of extracurricular activities in universities such as athletic clubs does not lie in belonging to an organization and instead it is necessary for a student to establish a self-sustained individual who has withdrawn from a “hierarchical system” in their voluntary activities. Studies of the impact of studying and other lives in universities on proactive behavior after starting working are meaningful, since almost no concrete or individual verification has been made on the theme because the theme began to gather attention recent years and few studies have been accumulated. However, this study is just one example, and a remaining future challenge is to proceed with the study focusing on various types of students. While various reforms have been promoted on university education, nothing is more important than proactive practices by students in formal curriculums and extracurricular activities in universities.

I はじめに

本研究は、大学時代の体育会活動が就職活動及び入社3年目頃までの初期キャリア形成においてどのよう

な影響を与えているかについて質的に分析するものである。

これまで筆者らは、大学時代の過ごし方や正課外活動への参加が社会人生活にいかなる影響を与えるのか

* 名古屋大学総合保健体育科学センター共同研究者
* * 名古屋大学総合保健体育科学センター教授
* Research Center of Health, Physical Fitness and Sports, Nagoya University
* * Research Center of Health, Physical Fitness and Sports, Nagoya University

について、大学から社会への移行の観点から、特に体育会系に所属していた社会人を対象に研究・分析を進めてきた(金森, 2016a, 2016b, 2016c, 2017a, 2017b, 2018a, 2018b; 金森・蛭田, 2018, 2019)。その結果、大学時代の正課外活動への参加は社会人として必要な多くの力を培う重要な機会であること、正課外活動と勉強との両立を行っていた者、及び社会人になってからスポーツ活動をしている者は、それぞれ社会人生活の充実につながる傾向にあることなどを具体的に明らかにしてきた。

しかし、これらの研究の多くは、社会人を対象に大学時代を振り返る回顧研究が主となり、現在のおかれた状況により過去が主観に左右されるという課題が伴っていた。また、アンケート調査が中心であったため傾向の把握は可能であっても、体育会活動のうちのどのような取り組みが就職後のプロアクティブ行動(組織に能動的に関わる個人の行動)につながっているのかについて具体的に把握する研究が残されている。

そこで、本研究では大学時代に体育会に所属し、大学院博士前期課程修了後就職し、入社3年目であるAさんにインタビューを実施し、大学時代の体育会活動が就職活動及び入社3年目頃までの初期キャリア形成においてどのような影響を与えているのかについて明らかにすることを目的とする。なお、Aさんには大学院在学時及び入社3年目の現在という2時点でインタビューを実施している。

Ⅱ 先行研究の検討と仮説の提示

人口オーナス現象により生じる労働力人口の減少が危惧されている⁽¹⁾。このため大学卒業者の就職は売り手市場にあるといわれるものの、一方で、早期離職や非正規雇用者となる割合が増加するなど大学卒業者にとって労働市場は相変わらず厳しい状況が続いている。大学卒業者の就職は、単に希望する就職先を決定することにあるのではなく、生涯のキャリア発展につながる働き方や自己の能力形成に貢献できる職業選択を考える必要がある。この点について、小方(2008)が、「学生に仕事観を植え付け、将来設計を明確にさせるだけではおそらく事態は好転しない。在学中に何をどのように学ばせ、どのような能力を備えた学生を社会に送り出すか。問われているのは大学教育そのもののあり方ではないか」と述べるとおり、大学における正課及び正課外教育の質のあり方が問われている。また、大学から社会への移行(トランジション)が難しくなってきたことに伴い、教育政策は、「生きる力、リテラシー、社会人基礎力、学士力、エンプロイアビリティ」などの「新しい能

力」(松下, 2010)を提案してきた。松下(2014)はこの「新しい能力」について、「後期近代を生き抜くために必要な能力として、多くの経済先進国で共通に、また、初等・中等教育から高等教育・職業教育、労働政策に至るまでの幅広い範囲で、目標として掲げられ、評価対象とされるようになった能力」と説明している。そして、この新しい能力については、「個人の能力をつけることはやはり重要であるが、現在あまりに期待が肥大化している」と新しい能力への偏重についても指摘している。

たしかに、金森・蛭田(2018)でも述べたが、これらの力については、社会において必要な力として列挙されるもののそもそも定義自体が曖昧であり、その力を大学教育がどのように培い、仕事にどう活かされるのかはよくわからないままである。このことは、本田(2004)が、「職業生活に対して学校教育がいかなる意義を持っているのか、いないかということ」、すなわち、学校教育の「職業的レリバンス」を考慮することの必要性を論じている。レリバンスとは、本田によれば「有意性」「関連性」であり、大学教育が職業生活にいかなる有意性があるか、職業的レリバンスの水準を均質に引き上げることの必要性を論じている。このことについて濱口(2013)は、「受けた学校教育が卒業後の職業キャリアに大きな影響を与えるという意味では、両者は密接である。しかしながら、学校で受けた教育の中身と卒業後に実際に従事する労働の中身とは、多くの場合あまり関係がない」として、改めて「日本の教育システムの最大の問題点は職業的意義の欠如にある」という本田由紀氏の主張の意義を記している。そして、「高度成長期以後の日本社会においては、学校教育における評価基準が一般学術教育に偏し、職業という観点が軽視されてきたこと」について論じている。このようにわが国の教育では職業意識の醸成が軽視されてきた点に大きな課題がある。

それでは、それを大学におけるキャリア教育やキャリア支援がそれを補完しているかといえ、この点にも疑問が呈されている。小方(2008)は、「キャリア教育ブームの違和感」「社会で通用する実質的な知識・技能あるいはその基礎を身に付けていないキャリア意識の醸成は、ただ空転するだけだろう」と述べている。たしかに、現在多くの大学で行われているキャリア教育は、一部の優れた取り組みを除いては、行政から示されたマニュアルどおりの自己分析や労働や雇用の知識習得等の内容で進められている。しかし、本来は、小方のいうとおり授業である程度の専門能力を身に付けた上でその専門が活かせる仕事やその関連の職業研究をすることが必要である。このため1年生前期配当のカリキュラムにはそれ相応の内容が検討されるべきであるがこの点の考慮のない大学もあり、この点についてみただけでも大学に

おける正課及び正課外活動を通じた能力形成のあり方については、職業的レリバンスの視座から研究の蓄積が求められている。

以上の問題意識のもと、本稿は、大学での学びや生活が就職後のプロアクティブ行動にどのような影響を与えているか（館野他、2016）という視点に着目した。館野他（2016）によれば、プロアクティブ行動とは、「組織内の役割を引き受けるのに必要な社会的知識や技術を獲得しようとする個人の主体的な行動全般」（小川、2012）のことで、組織に能動的に関わる個人の行動に着目した概念である。これまで大学での経験が初期キャリアにおける組織適応にどのような影響を与えるかということは、組織側からの「組織社会化」概念を中心に議論されてきた。一方、プロアクティブ行動は「組織に対する個人の主体的な役割」に着目した概念である。その中で、保田・溝上（2014）が「大学生活の充実度」から、「就職後の組織社会化に正の影響を与えていた」学生について、「大学生活に主体的に参加している学生であれば、就職活動及び就職後においても前向きかつ主体的な活動が期待できる」ことを明らかにしている。ただ、どのような大学生活を送っていた人が就職後のプロアクティブ行動に影響を与えているかの検証が残されており、館野他（2016）が6つの仮説を立ててこの点について検証している。そして、構造分析によるパス解析の結果を提示して、「大学生活が充実している学生は、入社後にプロアクティブ行動を行っている（館野、2016）」ことなどを明らかにした。

さらに、筆者らもこれまでの研究において、「体育会系は就職に有利」という言説に該当するといえるのは、「勉強との両立」をしていた男性の体育会系出身者にとりわけその傾向がみられること、加えて、大学の正課外活動に関係なく社会人である現在、主体的にスポーツに取り組んでいる者がポジティブな社会人生活を送っている傾向にあることなどを明らかにしてきた。しかし、「個人」の主体的な意識や活動が具体的にどのように行われているかについて、詳細に分析することは残されていた。

そこで、本稿では、Aさんへのインタビューを通して大学時代の体育会活動、就職活動、入社3年間の取り組みをいかに主体的に捉えているかに着目しながら、館野他（2016）の仮説検証を参考にして、以下の仮説を立て分析する。

仮説『大学時代の体育会活動に主体的に参加している学生は、大学生活を充実させ、就職後においてプロアクティブ行動を積極的に行う』

なお、本稿で論じるプロアクティブ行動を行いうる能力とは、単に企業で役に立つ能力ではなく、企業のみな

らずこれからの社会で活躍し貢献できる能力という意味である。アスリートとして活躍しながら大学院を修了し、現在も充実した社会人生活を送っているAさんの語りから、大学生生活の過ごし方や大学から社会への移行過程について分析し、そこから一般性や普遍性をくみ取っていく研究の蓄積は、これからの時代の高等教育を検討する上で意義があると考えられる。

Ⅲ 研究方法

（1）研究参加者

研究参加者Aさんは、中部地方の国立大学法人N大学工学部及び大学院工学研究科博士前期課程修了後、近畿地方に本社のある東証一部上場企業（製造業）に研究開発職として勤務している。2019年4月現在、入社4年目であり、自動車計測機器の研究開発に従事している。

筆者は、Aさんが上記大学院2年在学時である2015年11月にAさんが所属していた体育会トライアスロン部の活動等についてインタビューをしている。そして、大学院を修了後就職し入社3年目に再度インタビューを実施した。

「七五三現象」（入社3年目で中卒7割、高卒5割、大卒3割が離職する）という言葉に象徴されるように、大学生の就職では入社3年で3割の人が離職するとされる。その入社3年目において、Aさんは、仕事にどのように取り組み、また、大学時代の勉強や体育会トライアスロン部の正課外活動の取り組みが現在の社会人生活にどのような影響を与えているかなどについて詳細に分析する。

（2）データ採取方法

データ採取は、半構造化インタビューを用いて2時間程度で実施した。なお、これまでもインタビューに参加して頂いているため、日常会話的な進行で研究参加者の自由な語りが中心となっている。音声記録はICレコーダーで録音した後、逐語録として記録した。インタビューは、2019年1月に実施した。

（3）分析手法

分析手法は質的研究手法の一つである大谷（2008、2011）のSCAT（Steps for Coding And Theorization）を採用した。SCATは、マトリクスの中にセグメント化したデータを記述するもので、4ステップのコーディングの過程で脱文脈化し、データに記述されている出来事に潜在する意味や意義を構成概念として紡ぎ出して、ストーリー・ラインとして再文脈化して理論を導き出す手法で

ある。

本研究は $n=1$ の質的研究である。SCAT は「一つだけのケースのデータなど比較的小さな質的データの分析でも有効」(大谷、2008)とされている。大谷 (2013) によれば、「対象がたとえ一人でもデータ採取としてはインタビュー一人に関してだけ行っているのではなく、その背景にある多くの人に関するデータ採取も同時に行っているのだと考えることは不可能ではないが、これが質的研究で個別的、具体的に追究を深く行うことを通して、一般性や普遍性を汲み上げることを可能にする」ものである。これを大谷 (2019) は、個と社会の関係性の「納豆モデル」と命名して説明している。すなわち、箸で納豆一粒を取り上げようとしても、たくさんの納豆がくっついてきて一粒だけを取り上げることは困難であるように、対象がたとえ一人でも、「その背景にいる多くの人に関するデータ採取を同時に行う過程」と考えるものである。また、それは研究者の思索のみによって成立しうるものでなく、「質的研究は先行研究との知見等と照らし合わせることで客観性を担保する」と大谷は述べている。質的研究における $n=1$ の研究は、 $n=1$ だからこそ解明できる研究を目指す必要があり、本稿では、A さんが大学の体育会活動で何に取り組みどういう力を培っていたのか、そして、それが現在の充実した社会人生活にどのようにつながっているのか、 $n=A$ さんだからこそその分析を示す必要がある。

(4) 倫理的配慮

本研究は、名古屋大学総合保健体育科学センター研究倫理委員会の承認 (2016年5月10日承認、受付番号 28-09) を得て実施した。倫理的配慮として、まず、研究目的及び主な質問項目、個人情報とデータの取り扱いについて説明書を提示して説明した。次に、A さんに対し、自由意思に基づいて参加して頂くこと、参加同意はいつでも取り消し自由であること、音声記録は IC レコーダーにて記録すること、それはいつでも中断可能であること等を伝え、了承後同意書に署名を得て実施した。さらに、現在勤務する職場に関する内容等が含まれるため、逐語録完成時及び論文完成時の2時点で A さんに内容を示し公開の確認を取った。なお、A さんのプライバシー保護を確実にを行うため引用するデータには最小限の修正を加えた。

IV 結果と考察

1 A さんの語りの内容

A さんの語りを話の流れに沿って、4つの大テーマに分類し、さらに、1.「大学時代の体育会活動」では①②

③、2.の職業選択と適性・能力では④⑤⑥、3.「生涯スポーツ」では⑦⑧、4.「充実した社会人生活」では⑨⑩の小テーマに分類した (図1)。以下、文中の①～⑩はこの小分類の内容を示す。

2 SCAT による分析結果

A さんに対するインタビューの内容から抽出した上記①～⑩の語りについて、SCAT を用いて分析した。インタビューである筆者は X、インタビューは A さんである。なお、紙面の都合で SCAT のシートは省略または一部を抜粋し、会話番号が途中から、また、連番でない場合は一部分が削除されている。SCAT のシートを提示していない箇所はストーリー・ラインを示した。なお、ストーリー・ラインとは、SCAT の4ステップを記述後、〈4〉に記述したテーマを紡ぎ合わせて書き表したものである。大谷 (2019) によれば、「できごとをその関係性を含めて既述したもの」で、「〈4〉のコードをすべて使って書く」ものとし、「この確認のためには、ストーリー・ライン中のコードに下線を引くと良い」としている。

(1) 大学時代の体育会活動

① トライアスロン部入部動機 (ストーリー・ライン)

大学・大学院通して6年間体育会トライアスロン部所属し、一定期間キャプテンの経験もある。部活選択の契機は、高校3年時の北京オリンピックを見てトライアスロンへの興味を持ち、3種目の克服が必要なスポーツで達成することに魅了されたからである。

その後、大学受験の失敗と浪人生活を送り、努力して第一志望大学へ合格した。試練を乗り越えた成功体験が自己肯定感につながり、ハードルの高いスポーツへの挑戦心が芽生えた。

〈成功体験とさらなる高みへのチャレンジ〉

トライアスロンは、スイム (水泳)、バイク (自転車)、ラン (ランニング) の3種目を一人の競技者が連続して行うスポーツである⁽²⁾。

A さんがトライアスロンに興味を持ったのは、高3の時の北京オリンピックであり、その後、浪人生活に入り努力の末第一志望の大学に合格した。その試練を乗り越えた成功体験が高校時代に競技スポーツをしていなかったにもかかわらず、いきなり3種目というハードルの高いスポーツへチャレンジする契機となっている。A さんが努力の結果第一志望の大学に合格できた体験は、マスローのいう自己実現の達成 (マスロー、1998) であり、より困難なものに挑戦する気持ちへとつながったと推測できる。

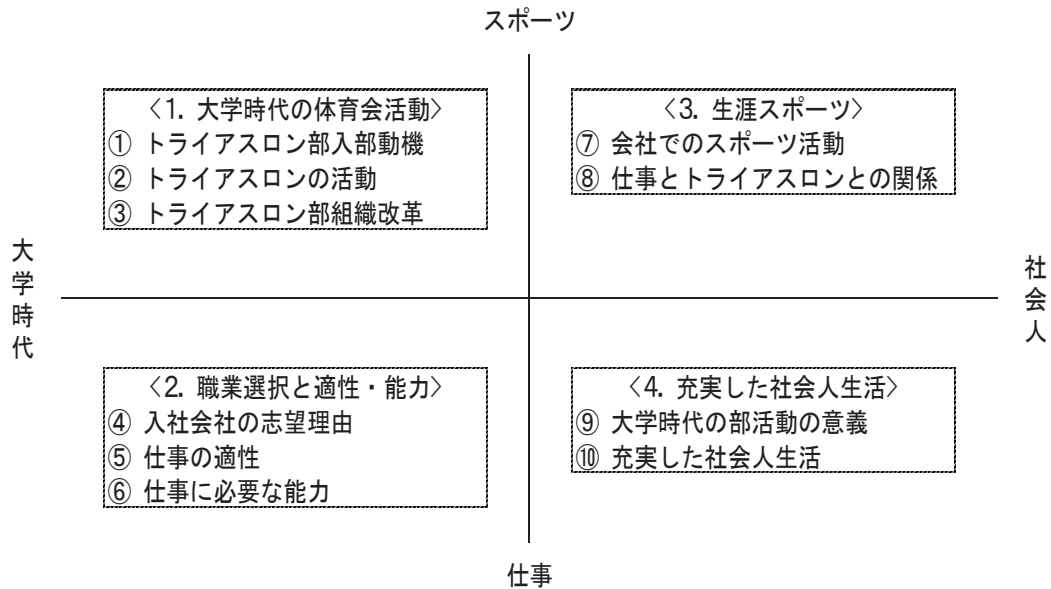


図1 インタビューより抽出されたカテゴリー

② トライアスロン部の活動（ストーリー・ライン）

組織として課題のある体育会に入部した。当初は、体力不足で特に水泳に課題があった。トライアスロンに出場不能だった初年次を経て、2年次で初めて完走できたが水泳の課題が付いて回る。過酷なトライアスロンにチャレンジし続ける意義は、達成感より苦痛をより感じてもさらに上を目指す欲求と高揚感にある。一回の完走で退く後輩もいる過酷なスポーツである。継続するか否かの二者択一を迫られたが、自分は充実感が得られる道を選択した。この意思決定後の練習意欲が自分の分岐点となった。向上心の有無だけである。トライアスロンという個人種目はタイムが指標で頑張りが結果に直結する。ゴール時の反省点から次なる目標の明確化を行い、高みを目指し続けるスポーツでセルフマネジメントが求められる。

〈エンデュランススポーツであるトライアスロン〉

体育会活動のうち、一般的に大学から始めることが多いトライアスロンは過酷なスポーツであり、入部後に継続するか否かの二者択一を迫られる人が多い。しかし、Aさんは向上心を持ち、目標を明確化して高みを目指し続けることに意義を見出して継続を選択した。このようにスポーツを通じた自己を高める契機として、金森(2016c)では、「体育会運動部を通じて得られた力」について、交流力（「人と協調し交わる力」と定義した）と自己力（「自分自身を高める力」と定義した）とに2分類して分析した結果、自己力は全体の62.8%を占め、交流

力の回答人数（同37.2%）に比較して約1.7倍多かった。すなわち、体育会運動部で活動している学生の6割以上は、「自分自身を高める力」を得ていると自覚しておりAさんも同様であろう。また、浜田(2009)は、トライアスロンが「長時間に渡って苦痛を伴う実践として特徴づけられるエンデュランススポーツの1つである（Atkinson, 2008）」こと、また、「漸次積み重なる苦痛に耐えることは、人々にとって自らに課した試練を乗り越える挑戦であり、その達成により自らの生き方に対する正当性の獲得がなされる（Le Breton, 2000）」ものであることを文献から示している。このようにトライアスロンは単なる競技スポーツというだけでなく、アイデンティティの構築に寄与するスポーツでもあるといえる。

③ トライアスロン部組織改革（SCAT）

Aさんがトライアスロン部に入部した当時は少人数の緩い組織であった。次年度に練習熱心な後輩が入ってきたため、任務を分担して役職を決め種目ごとの責任分担も行い、主体的に部の組織改革に着手した。個人競技でもあるため自主性を尊重しつつ、一方で部活動の存在意義も確認していった。各自3種目の得手不得手があるため相互補完し合いながら、勉強会実施や科学的練習法の導入など組織的な議論を通して実践していった。大学の部活動ならではの学生主導としての活動を主体的に行う過程で、組織づくりなど経営学やトレーニングの専門知識等を身に付けている。

③ トライアスロン部組織改革

発言者	番号	内容	<1>テキスト中の注目すべき語句	<2>テキスト中の語句の言い換え	<3>左を説明するようなテキスト外の概念	<4>テーマ・構成概念(前後や全体の文脈を考慮して)
A	1	組織といっても、そもそも少人数でしたから、ある程度の人が入ってきて、後輩も結構熱心に練習してくれてるからこのままじゃ駄目だろうって思ったんですね。で、それをどう改革するかを僕の一つ上の先輩がいろんな取り組みを始めたんです。そして、まず、部の中にキャプテンと主務っていう2つの役職しかなくて、キャプテンが何でもやってくれるみたいになってたので。	組織/少人数/人が入ってきて/後輩も熱心に練習してくれてる/このままじゃ駄目だろう/それをどう改革するか/僕の一つ上の先輩がいろんな取り組みを始めた/部の中にキャプテンと主務っていう2つの役職しかなくて/キャプテンが何でもやってくれる	少人数の組織/熱心に練習する後輩入部/現状打破/組織改革/先輩主導/キャプテンと主務の二つの役職のみ/一任	少人数の部活/熱心な後輩の入部/現状打破のための組織改革/キャプテンへの一任	少人数の部活/熱心な後輩の入部/現状打破の必要性
X	2	ええ。				
A	3	そういう特定の人に何か全ての責任を持たせるのは間違っているだろうというので、まず何かいろんな役職をつくったんですね。何かその広報とか練習考える人とか。	特定の人に全ての責任を持たせる/間違っているだろう/まずいろんな役職をつくった/広報とか/練習考える人とか	特定の人に責任を負わせる/組織課題/任務の分担/広報/練習メニューの考案	責任集中/組織改革/任務の分担/広報/練習メニューの考案	任務の分担のための役職づくり
X	4	ええ。				
A	5	トライアスロンって、ランパートとスイムパート、バイクパートがあるんで、それぞれのパートに責任を持たせる人をつくったわけです。その人がスイムパートの練習やったら練習メニューを考える。	トライアスロン/ランパート/スイムパート/バイクパート/それぞれのパートに責任を持たせる人をつくった/パートの練習/練習メニューを考える	トライアスロン/ランパート/スイムパート/バイクパート/パートごとに責任者創設/練習担当者が練習メニューも考案	トライアスロン/ランパート/スイムパート/バイクパート/パートごとの責任者/練習担当者が練習メニュー考案	3種目あるトライアスロン/種目ごとの責任分担
X	6	ええ。				
A	7	で、苦手な人にどういう練習メニュー、アドバイスをあげたらいいかということを考える。そういう役職をつくって、その責任を持たせるところから始めたと思います。	苦手な人/練習メニュー/アドバイス/考える/そういう役職をつくって/責任を持たせる/ところから始めた	苦手克服/練習メニューの考案/アドバイス/担当の役職/責任所在の明確化/着手	弱点強化/練習メニュー考案/アドバイザー/役職創設/責任所在の明確化/改革に着手	指導体制の強化/責任体制の明確化
X	8	先輩も一生懸命やってくださったわけなんですわね。				
A	9	やりました。はい。で、それに対して僕も同意するところがあったので、まあ2人で一緒にやったっていう感じですね。	やりました。はい。で、それに対して僕も同意するところがあったので、まあ2人で一緒にやったっていう感じですね。	先輩と二人で一緒にやった	先輩と共同で改革に着手	主体的な組織改革
X	10	ああ、そうなんですわね。				
A	11	そうですね。で、それまでは部全体で強くなるっていうよりか、個人が自主的に練習して強くなるみたいな感じでやってたんで、多分それって個人種目というか個人競技にはどこまでもつきまとうことなんですよ。	部全体で強くなるより/個人が自主的に練習して強くなる/多分/個人種目/個人競技/どこまでもつきまとうことなんですよ	部全体の取り組み/個人の自主練習/個人競技特有	組織的な取り組み/個人の自主練習/個人競技の特性	個人の自主性優先/個人競技の特性
X	12	うん。				
A	13	みんなが別に自分のことだけやってればいいやって思ってしまうので、それはちょっとまずいと。	みんな/自分のことだけやってればいいやって思ってしまう/それはちょっとまずい	個人主義的な練習の認識/部活動としての課題	個人主義的認識/部活動としての意味付け	部活動の存在意義
X	14	ええ。				
A	15	しかもトライアスロンっていうその3種目で、みんな得意、不得意があるわけなんです。	トライアスロン/3種目/みんな得意、不得意がある	トライアスロン固有/3種目あるため得意不得意がある	トライアスロン固有/3種目の得意不得意がある	トライアスロン固有の課題
X	16	ええ。はい。				
A	17	そこを補完し合うというか。スイムが得意な人はスイムパートをやって、バイクが得意な人はバイクパートをやって。最初は結構責任を持たせるとしても、やらされてるようなところだったんですけど、僕もランパートのリーダー的なところになったんですね。それで、勉強会じゃないですけど、ランニングの本を買ってきて、どういうペースで走ったらいいかなとか、脈拍を取る計測器とかも買って、こういうペースで走ったらいいかなとか、練習するだけではないって、科学的に本とか読んだ内容で、こういうトレーニングをしなさいっていうのを、月1回会議をやることにして、そこで何かプレゼンとかつくって、夜とかにみんなでスカイプで会議しないで発表して、質問してもらったりとかっていうのはしてました。	そこを補完し合う/スイムが得意な人はスイムパート/バイクが得意な人はバイクパート/最初は責任を持たせるとしても/やらされてるようなところだった/僕もランパートのリーダー的なところになった/それで/勉強会/ランニングの本を買ってきて/どういうペースで走ったらいいかなとか/脈拍を取る計測器とかも買って/こういうペースで走ったらいい/ただがむしやりに練習するだけではないと科学的に/本とか読んだ内容/トレーニングをしなさい/月1回会議をやることにして/プレゼンとかつくって/夜にみんなでスカイプで会議しないで発表して/質問してもらったりとか/してました	そこを補完し合う/得意なパート/最初は責任を持たせる/やらされてる/僕もランパートのリーダー/勉強会/ランニングの本/購入/走りのペース/脈拍を取る計測器購入/ただがむしやりに練習するだけではなく科学的に/本の内容/トレーニング内容の改善/月1回会議/プレゼン作成/夜にみんなでスカイプ会議/議論	補完関係/得意パートの担当責任/任意の自分分はランパートのリーダー/勉強会実施/ランニングの本から走法の学び/脈拍計測器購入/自己流から科学的な練習の導入/トレーニング内容の改善/全体会議/プレゼン/スカイプ会議/議論	相互補完/得意パートの分担/勉強会実施/自己流から科学的練習法へ/トレーニング内容の改善/組織的な議論
X	18	ああ、そうなんですわね。そうすると、監督とかコーチっていうのは、ほとんどノータッチだった。学生主導なんですわね。				

〈体育会活動で何に取り組んでいるかが重要〉

齊藤（2010）は、体育会系人材が上司の命令を絶対服従する「従順な羊」と揶揄され（城，2006）、企業から否定的な評価があることを紹介する一方で、知識基盤社会において期待されている活動でもあることを述べている。「活動目標に準じ、目標設定と計画立案をし、練習メニューや技術・戦術を工夫し、日常的にチームを運営している場合が多い。そして、このような活動が学生主体で行われている」ことから、「このような組織活動が合理的に行われているとするならば、大学の組織的スポーツは知識基盤社会においてまさしく期待されている活動であり、キャリア学習の格好の機会」であると主張している。体育会系といってもコーチや監督から指示されたことをしているのか、それとも主体的に課題に取り組んでいるのかで、そこで培われる力は大きく異なり、「体育会活動で何にどのように取り組んでいるか」が就職後におけるプロアクティブ行動につながるか否かの差が出るものである。

Aさんが取り組んだトライアスロン部の組織改革では、課題発見力、問題解決力など、「新しい能力」（松下，2010）に提示されている力を培っていたと推測される。体育会活動で目の前の課題に対峙し、それを学生たちが主体的に取り組んでいればこれらの力は習得できるものであり、大学における正課外活動は多様な能力が涵養できる重要な場となる。

（２）職業選択と適性・能力

④ 入社会社の志望理由（ストーリー・ライン）

トライアスロンも仕事も好きなことを選択した。排ガス分析装置とそれを使って得られる結果と原理に純粋な興味があった。自分の専門性が活かせるニッチな分析装置は、限定された業種であるため、分析装置への興味に初志貫徹した。選択した会社は興味のある業種であることに加え、社是が魅力的な会社でもあった。「おもしろおかしく」という社是は、トライアスロンに取り組む姿勢と共通である。何でも面白くやろうという気持ちは持っているため、働くことの意味を考える時、働くことへの動機づけとしても面白く捉える働き方をしたいし、興味を持てる環境で共感できるエネルギーがある人と共働したいと考えている。「おもしろおかしく」は創業者の言葉だが、人生の貴重な時間を長く費やす仕事は、やるなら「おもしろおかしく」したいため、豊かな人生を送る内容の社是に共感した。稼ぐ手段としての仕事だけではない会社の社是や企業理念への共感がこの会社を選択した理由である。

〈楽しく働きたいということとやりたいこと志向〉

2019年卒マイナビ大学生就職意識調査⁽³⁾によると、2019年卒学生の就職観は、3人に1人が「楽しく働きたい」であり、これは2001年卒から1位を継続している。Aさんが語るように大学で専攻して興味を持ったことを仕事にし、人生の貴重な時間を長く費やす以上、おもしろおかしく豊かな人生を送りたいと思うことは、ポジティブなやりたいこと志向といえる。

一方、「好きなことを仕事に選択する」ということは、となく「やりたいこと志向＝フリーター」の論理に結び付けられがちである。フリーターの増加の背景にやりたいことにこだわる意識があり、フリーターの夢追いやモラトリアムなどの議論に結びつけているもの（e.g., 下村，2002；山田，2002）が多く、こちらはネガティブな意味に捉えられている。もっともフリーターの中にも「良いフリーターと悪いフリーター」が存在し、やりたいことがありそれをめざしていることはフリーターであることを正当化するものとされる（久木元，2003）。また、大学生では「就職活動においては企業からエントリーシートや面接でやりたいことは何かを聴かれるため、就職情報誌などでは多くの『やりたいこと』言説が生産されている」（橋口，2006）という説明もある。

「やりたいこと志向」と一概に言っても二分されており、この差はどこから来るのか。大学で充実した正課授業で学び、学生自身が真摯に正課及び正課外活動に取り組み、健全な経営と人材育成に努めている企業に就職できれば、「楽しく働きたい」は可能となる確率が高くなるが、これらが全部揃うことは難しいのも現実である。大学教育、学生の大学で学ぶ姿勢、企業の人事管理、それぞれ相互にレリバンスの考慮が必要である。

⑤ 仕事の適性（ストーリー・ライン）

入社3年目となり唯一無二の会社といえるほど現在の会社に満足している。第一希望の部署に配属され技術系開発部所属である。技術的スキルやエンジニアとしての専門能力という本来求められる能力が会社からみられている。専門能力不足に自覚的であるが、専門能力のみならず組織改革力や自主性という非認知能力を評価してくれる会社である。多角的な人物評価で積極性やリーダーシップという自分の強みを高評価してくれる。具体的な評価の開示や面接評価があり行き届いたOJTがなされている。

〈人事管理のあるべき姿〉

Aさんの語りから、この会社では、正当な評価がなされ、それに基づいたOJTが機能する人事管理が実践されていることがわかる。「多分ここしかないっていうと

ころに僕は入ったと思いますね」という本人の語りを唯一無二の会社とコーディングしたが、満足した社会人生を象徴する発言である。藤田（2011）は、安心して働ける職場環境について「職場の上司は管理のプロでなければならぬ。管理とは仕事の指示をしたり目標達成のために鞭を振ることではなく、働きやすい環境をつくり、職場を活性化し、社員の力量をしっかりと見きわめ、指導・育成を徹底して、組織としての成果を向上していくこと」と述べているが、このことが実践された組織に在るといえる。いくら優れた人材を採用しても、企業が適正な人事管理を実践しなければ人材は育たず優秀な人材ほど離職するものである。学生の質と人事管理の質の水準のマッチにこそ職業的レリバンスは有意性を発揮する。

⑥ 仕事に必要な能力（SCAT、太字斜体はAさんの語りを示す）

Aさんは、就職に際してキャリアセンター等に依存せず自己決定している。

まあ、そんなのはやらなくても、結構自分のことはわかっているつもりだったの。

で、実際自分の感覚を信じて今の会社、職場に入ったら、やっぱりぴったりだったんで。

この語りは重要な示唆に富んでいる。大学のキャリア教育でジョブカードや自己分析ツール等を用いているケースがある。大切なことは画一化されたツールに頼ることなく、学生自身が自ら主体的に自分を知ることである。また、目先の内定獲得にとらわれることなく、「その学生にとって生涯に亘るキャリア形成に本当にふさわしい企業に入社できたのか。何より本人が主体的な就職活動をしたのか」という学術研究に基づいた指導がなされているかが重要である。そこに入社後のプロアクティブ行動に差が出ると考えられる。

それでは、なぜAさんは自分の就職を自己決定できたのか。Aさんは、トライアスロンという個人競技をしていると自分の内面に意識が向けられるものであることを語っている。さらに、仕事で求められる能力については、トライアスロンともう一つ加入していたサークルから学んだと語っている。

自主的にやるっていうことですね。まあ課題解決能力とかもありますけど、多分僕は、何か特に企業に入ってやっていくための一番必要な能力って、主体性だと思うんですね。

今、目の前で起こっていることを自分のこととして考えられるかどうか。

気付いた人が、これを解決するためにどうやろうって動いていかないと何も始まらないんです。

また、体育会活動のあり方としては、以下の発言に着目したい。

指導者がいて、もう練習メニューも組まれてて、「おまえ、これ集中してやればいいんだよ」って言われてたら、まあ競技としては強くなれたかもしれないんですけど。そうですね。

何かほかの仕事とかに活かせるような取り組みの姿勢とか経験にはならないと思います。

この発言の重要な点は、体育会活動が学生の主体性に任された活動であるのか、競技に勝つための用意された練習メニューをこなすことが主たる活動なのかという点にある。もちろん、オリンピック強化選手などは別次元の話であるが、一般学生が一般企業に就職するというケースの場合、体育会での取り組み内容の質や方法の違いによって習得する力は異なることが推測される。

東原他（2019）は、大学での体育会活動について、所属大学や入試経路といった入学前に決まる属性と、入学後の学業と競技の実態、そして就職活動時の学生アスリートであったことの企業の評価である学生アスリートプレミアム（SAP）から調査分析を行っている。その結果、学生アスリートの勉強との両立意識は、所属大学の威信等、入学前に決まる属性ではなく、入学後の学業・競技への取り組み、そしてSAPへの期待によって多様な形をとることを明らかにした。そして、東原他（2019）は、「就業後の適応感に影響を及ぼすというならば、学業・競技生活を共に充実させる制度を設計すべきである」と主張しているが本稿も同意するものであり、体育会活動でどのような活動をどのような関わり合いで取り組むかが重要な点である。そして、大学の正課授業及び正課外活動は、両輪の如く大学生活の中で関連し合いながら大学生活の充実に貢献すべき役割を持っていることを再確認すべきであると考えられる。

（3）生涯スポーツ

⑦ 会社でのスポーツ活動（ストーリー・ライン）

生涯スポーツとしてのトライアスロンは入社後も毎年完走している。会社に自転車クラブがあるので入部し、企業スポーツとして週1～2回、月に2～3回、遠くまで自転車乗りに行く。30名ほどの部員がいる。競技志向ではないがレースに参加して、企業スポーツとして会社のイメージアップに貢献している。広報としてのレース出場という意味もあり地域のスポーツイベントでボランティアをして、CSR（企業の社会的責任）としての社会貢献活動をしている。

ランは個人でハーフマラソン参加することで実践し、自転車クラブ入部はトライアスロン継続のためでもある。健康維持目的のトライアスロンとして生涯スポーツ

大学時代の体育会活動と就職後のプロアクティブ行動との関係

⑥ 仕事に必要な能力

X	9	就活とかキャリア教育みたいなのか、あとキャリアセンター主催のセミナーなどは？				
A	10	キャリアセンターへ一回も行ったことないです。まあ、そんなのはやらなくても、結構自分のことを分かってるつもりだったの。で、実際自分の感覚を信じて今の会社、職場に入ったら、やっぱりびったりだったんで。	キャリアセンター／一回も行ったことない／そんなのはやらなくも／自分のことを分かってるつもり／実際自分の感覚を信じて／今の会社、職場に入ったら／やっぱりびたりだった	大学のキャリアセンターには頼らない／キャリアセンターに頼らなくても／自己理解できている／自分の感覚を信じて入社を決定／やっぱり当たっていた	大学のキャリアセンターには頼らない／他人に依存する必要はない／自己理解は自分でできている／自分の感覚を信じて自己決定／正しい選択	キャリアセンターには依存せず／自分の就職は自己決定する／自己理解はできている／直感を信じる／正しい選択
X	11	やはり自分のことは自分である程度考えるなり分析するなりして自分で知ろうとするものですね。				
A	12	そうですよ。トライアスロンとかをやっていると、やっぱりそういうことは。	自分のことはわかっている／トライアスロンとかをやっていると／やっぱりそういうことは	自分と向き合うスポーツ／自分のことは自分でわかる	自分と向き合うスポーツ／自己分析できている	自分と向き合うスポーツ／自己分析できている
X	13	分かってきますよね。				
A	14	多分そういう自分のこと、要は何か個人競技って自分の内面に意識が行くものですね。	自分のこと／個人競技って自分の内面に意識が行くもの	自分の内面／個人競技を通して内面に意識がいくもの	個人競技を通して自己の内面に意識は向く	個人競技を通して得た自己理解
X	15	そうですね。AIの時代が到来して、今ある仕事もなくなるかもしれないから、さまざまな能力を付けなきゃいけないという風潮があるんですけども。なにが大切だと思いますか。				
A	16	自主的にやるっていうことですね。まあ課題解決能力とかもありますけど、多分僕は、何か特に企業に入ってやっていくための一番必要な能力って、主体性だと思うんですね。	自主性／課題解決能力／特に企業に入って一番必要な能力は主体性だと思う	自主性／課題解決能力／特に企業では主体性が必要	自主性／課題解決能力／特に企業では主体性が必要	自主性／課題解決能力／特に企業では主体性が必要
X	17	はい。				
A	18	今、目の前で起こっていることを自分のこととして考えられるかどうか。	今、目の前で起こっていること／自分のこととして考えられるかどうか	目の前のできごとを自分のこととして捉える力	目の前のできごとを自分のこととして捉える力	吸収力
X	19	うんうん。				
A	20	自分が取り組むべき課題として考えられるかどうかっていうのが一番大切なところで、別に上の人たちってそんな細かいところとか、現場のトラブルとかまで認知しているわけじゃないんで。	自分が取り組むべき課題として考えられるかどうか／一番大切なところ／上の人たちってそんな細かいところとか／現場のトラブルとかまで認知しているわけじゃない	自分の課題として捉える／上層部は細かいところや現場のトラブルまで認知していない	会社では現場の詳細まで把握できない／どんなことも自分の課題として捉えて実践することが求められる	目の前の課題を自分のこととして捉え解決する力
X	21	はい。				
A	22	気がついた人が、これを解決するためにどうやろうって動いていかないと何も始まらないんです。	気がついた人が／解決するためにどうやろう／動いていかないと何も始まらない	気がついた人が課題を解決しようとして動くことから始まる	デザイン思考／実践的・創造的問題解決	デザイン思考力
X	23	はい。				
A	24	そういうところが多分僕は、意識付けがされていると思うんですね。何か同好会みたいなクラブに入って、誰も何も言ってくれないし、やめるのも自由だけど、でもどうにかしたいと思っていろいろやっていったわけです。	そういう点／僕は意識付けがされている／同好会みたいなクラブに入って／誰も何も言ってくれないし／やめるのも自由だけど／でもどうにかしたいと思っていろいろやっていった	デザイン思考への意識づけ／自律型組織の形成／試行錯誤	主体的な組織改革を通じて培った力／試行錯誤	解決志向の思考／主体的な組織改革
X	25	はい。				
A	26	そういうところで鍛えられたところはありますね、もちろん。	主体的に行動／経験から得られたもの	主体的行動／経験から得られた暗黙知	主体的行動／暗黙知	主体的行動から得た暗黙知
X	27	ありますね。				
A	28	指導者がいて、もう練習メニューも組まれてて、「おまえ、これ集中してやればいいんだよ」って言われてたら、まあ競技としては強くなれたかもしれないんですけど。	指導者の下／練習メニューも組まれている／メニュー消化の練習／競技としては強くなるかもしれないけれど	指導者の組んだ練習メニューに基づく練習／競技成績は伸びる可能性あり	他人に作られたプログラム／競技成績は伸びる可能性あり	管理されたプログラム／成績強化にはなる
X	29	そうですね。				
A	30	何かほかの仕事とかに活かせるような取り組みの姿勢とか経験にはならないと思います。	ほかの仕事に活かせるような取り組みの姿勢／経験／ならない	既存のメニューを消化するだけでなく、他に応用できない	他人の作ったものを鵜呑みしては主体的に動けない	創造的な主体性が大切

としても位置付けているので、会社の朝礼スピーチの話題で80歳までトライアスロンを継続する夢も宣言している。高齢まで優勝を目指して継続して健康に生きることを目指している。理想は自分の好きなスポーツを継続することにある。

〈企業スポーツとしてのトライアスロン〉

Aさんにとって大学から始めたトライアスロンは、入社後3年目の段階で健康維持のためにも継続する生涯スポーツとしても位置づけている。目標を持って取り組むことはもちろん、なにより好きなスポーツを継続するということが目標になっている。さらに、主体的に企業スポーツに参加し、会社の社会貢献活動にも積極的に関与している。

⑧ 仕事とトライアスロンとの関係（ストーリー・ライン）

研究職で頭脳労働である。仕事とトライアスロンとの関係については、仕事では粘り強さや体力、集中力が必要な時もあるが、体力や忍耐力はトライアスロンで鍛えられたと思う。極限体験のある体育会系経験者は同様だが、体育会活動から体力、忍耐力、精神力が培われている。自己管理はトライアスロンの特長で水泳、自転車、ランニングという計画性が必要な3種目競技であるため、能力限界の見極めは、仕事のタスク管理に適応できている。トライアスロンの経験は仕事に有益である。

〈仕事に有益なトライアスロン〉

梶本⁽⁴⁾は、ビジネスに通ずるトライアスロンで培った能力として以下の能力を挙げている。まず、問題解決能力であり200キロ以上も泳いだり走ったりしている間には必ずトラブルが起きるが、そのトラブルをどう処理するかが求められる競技であること、次に、長い距離を完走目指している過程でマインドコントロールが必要となるが、それは仕事に十分活用可能であるという。トライアスロンは頭脳、体力、経験値など総合力が必要で、フィジカルとメンタルの強さが仕事に役立つものとしている。

（４）充実した社会人生活

⑨ 大学時代の部活動の意義（SCAT、太字斜体はAさんの語りを示す）

部活動の意義について、Aさんはここで2つ語っている。まず、「自らチャレンジし努力して成功する体験が自分を高めるものであり、そして、それらを継続することに意味がある」という点である。

大学受験に失敗したのが10年ぐらい前で、そこか

ら自分で選んだ志望校に向かって勉強して、受かるっていう1つ成功した体験があったことと、で、その中で多分何か養われたのか分からないですけど、何かにチャレンジして何かを達成する。自分を高めていくっていうプロセスをトライアスロンで継続できた。

最初は勉強で、次はトライアスロンで、今はまあ仕事かなど。そういうので自分の、何ていうか課題というか、頑張って打ち込めて自分を高めていく実感を得られるものをずっと持ててるっていうのは幸せなことだと思いますし、それを継続できているってのは非常に大きいです。

大学の講義にどれだけ興味を持てるかっていうのもありますけど。でも、それで多分頑張って成績取ったことをモチベーションにできる人って、そんなにいないと思いますね。

もう1点は、多様な人との人間関係の構築の機会が得られる点である。

特に部活とかだったら、あんまり気の合わないような人もたくさんいる中で、それは多分社会へ入ったときにいっぱい経験することなんですけど、いろんな人とどうやって付き合っていくかというところを学べるいい場所、環境だと思いますね。

平成29年の「若年者の能力開発と職場への定着に関する調査」⁽⁵⁾結果によると、離職の背景に男女とも労働時間問題や健康被害が挙げられるが、新卒3年以内離職者にみられる独自の特徴としては、「人間関係がよくなかった」ことが主要な離職理由の一つであるとされている。大学から社会に移行して入社3年以内の離職理由として人間関係の構築が課題となる中で、大学の正課外活動は、多様な人との交流体験ができる貴重な場となるものである。

⑩ 充実した社会人生活（ストーリー・ライン）

週末は同期と旅行に行くこともある。クラブ活動がメインで、社内のクラブ活動で運営メンバーもしている。リータースhipを取って年間スケジュールの立案もしているが、トライアスロン部時代の経験が活かされている。充実した社会人生活を送っていてこの会社を選んで大正解だった。トライアスロン経験が仕事の満足につながる。指示されるより主体的に行動することで主体性に対する会社の高評価も得ている。内発的動機付けによる自己肯定感が得られている。

〈トライアスロン経験と仕事の満足〉

白戸（2010）が、「トライアスロンは3種目ある。それぞれ戦略を立てなければならない。そこでインテリジェ

大学時代の体育会活動と就職後のプロアクティブ行動との関係

⑨ 大学時代の部活動の意義

発言者	番号	内容	<1>テキスト中の注目すべき箇所	<2>テキスト中の語句の言い換え	<3>空を説明するようなテキスト外の概念	<4>テーマ・構成概念(前後や全体の文脈を考慮して)
X	1	今、Aさんはやりたいこともやれて、とても充実した社会人生活を送っていらっしゃるように私にも伝わってくるんですけども。				
A	2	はい。	充実した社会人生活を送っている	充実した社会人生活を送っている	充実した社会人生活を送っている	充実した社会人生活を送っている
X	3	今、自分がこういう状態であることにについて、自分のここ10年ぐらいを振り返ってみて、やってきたことがやっぱりベストだったと思われませんか。そしてそれが具体的ににはトライアスロンであるということでしょうか。				
A	4	そうですね、もはや10年ですよね。だからまあ大学受験に失敗したのが10年ぐらい前で、そこから自分で選んだ志望校に向かって勉強して、受かるっていう1つ成功した体験があったことと、で、その中で多分何か変わったのか分からないですけど、何かにチャレンジして何かを達成する。自分を高めていくというプロセスをトライアスロンで継続できた。	10年ですよね/大学受験に失敗した/10年ぐらい前/そこから/自分で選んだ志望校に向かって勉強し/受かる/1つ成功した体験/何か変わったのか分からないんですけど/何かにチャレンジして/何かを達成する/自分を高めていくプロセス/トライアスロンで継続できた	大学受験に失敗/10年ぐらい前/そこから/自分で選んだ志望校に向かって勉強し/受かる/1つ成功した体験/何かにチャレンジして/何かを達成する/自分を高めていくプロセス/トライアスロンで継続できた	10年ほど前/浪人生活/努力/成功体験/チャレンジして達成する/自分を高めるプロセス/トライアスロンで継続できた	浪人生活/目標設定/主体的な努力/成功体験/自分を高めるプロセス/トライアスロンで継続
X	5	ええ。				
A	6	勉強とか研究とかもほどほどやったんですけど、そういう流れに乗ったというか、自分の中での精神的な変化っていうのは、やっぱり10年間にあったと思います。それをいい方向に、最初は勉強で、次はトライアスロンで、今はまあ仕事かなと。そういうので自分の、何ていうか課題があるから、頑張って打ち込んで自分高めたい/実感を得られるもの/ずっと持ってる/幸せなことだと思います/それを継続できているっていうのは非常に大きいです。	勉強とか研究とかもほどほどやった/流れに乗った/自分の中での精神的な変化/10年間にあった/それをいい方向に/最初は勉強/次はトライアスロン/今はまあ仕事かな/自分の/課題という/頑張る/打ち込んで自分を高めていく/実感を得られるもの/ずっと持ってる/幸せなことだと思います/それを継続できている/非常に大きい	勉強や研究の取り組み/10代後半からの10年/精神的变化/いい方向/勉強/トライアスロン/仕事/自分の課題に頑張る/打ち込む/自分を高める/実感を得られるものを/持てる喜び/継続できている	10代後半からの10年/勉強や研究に取り組んだことから得たもの/精神的充実/トライアスロン/自分の課題に打ち込んで自分を高めている実感/達成感/継続できる幸せの実感	大学から社会人/精神的变化/勉強と研究/トライアスロン/仕事/目標達成/自分を高めていく実感/継続できる幸せ
X	7	そうですね。				
A	8	その中でトライアスロンというのは大きなウェイトを占めていて、今でもやっているっていえません。	その中で/トライアスロン/大きなウェイトを占めていて/今でもやっている	トライアスロン/人生の大きなウェイト/かけがえのないもの	トライアスロン/人生でかけがえのないもの	かけがえのないトライアスロン
X	9	そうですね。先ほど、受験の失敗のことを話してくださったんですけども、もし失敗しなかったとするならば、トライアスロンやっていたでしょうか。				
A	10	やってなかったかもしれないですけど、うーん。ただ、ストレーツで現役で受かったら、多分もう高校の時点でその、今言ったようなマインドはある程度あったと思います。	ストレーツで現役で受かった/高校の時点で/今言ったようなマインド/ある程度あったと思います	目標設定して目標達成するマインドは高校から持っていたかもしれない	目標設定/目標達成するマインド/高校から持っていた可能性	向上心は元来持っていた可能性
X	11	ああ。逆にそう考えられますね。				
A	12	だからまあ、そういう挫折っていうのは一つ大きかったのかもしれないですけどね。大学落ちて、何かもう周りみんな大学生やっつて中で、一人黙々と勉強しているときに、何かフラストレーションみたいなものがたまっているって、それがトライアスロンに挑戦してみようという気持ちになったのかもしれないです。	挫折/大きかったのかもしれない/大学落ちて/周りみんな大学生やっつて中で/一人黙々と勉強しているときに/何かフラストレーションみたいなものがたまっているって、それがトライアスロンに挑戦してみようという気持ちになったのかもしれない	挫折/大学落ちて/周りみんな大学生/一人黙々と勉強/フラストレーション/トライアスロンへの挑戦の契機の可能性	大学受験の失敗/疎外感/精神力や自己規律が求められるトライアスロン挑戦への契機になった可能性	浪人時代があったこととで過酷なトライアスロンへの挑戦が現実化
X	13	大学時代に、体育会系かどうかは別としても、それはサークルであってもいいと思うんですけども、スポーツなんかに打ち込むっていうことは大事だと思われませんか。				
A	14	あの、絶対やった方がいいと思います。というのは、勉強では達成感には得にくいと思います。大学の講義にもよる/多分頑張った成績取ったことをモチベーションにできる人って、そんなにいないと思います。	大学時代にスポーツに打ち込むことは重要/勉強では達成感には得にくい/大学の講義にもよる/多分頑張った成績取ったことをモチベーションにできないと思います	大学時代のスポーツ活動/勉強からでは得にくい達成感がある/大学の成績はモチベーションにならない	大学時代のスポーツ活動/勉強からでは得にくい達成感/モチベーションになる	大学の体育会活動は達成感を得られる場
X	15	うん。				
A	16	それよりもっと日常の課外活動とかで、まあ別にサークルでもいいと思うんですけど。	課外活動/サークルでもいい	課外活動やサークルでもいい	有益な正課外活動	有益な正課外活動
X	17	はい。				
A	18	ただ、目標がない活動はあまりよくないと思います。	目標がない活動/あまりよくないと思います	重要となる目標設定	重要となる目標設定	重要となる目標設定
X	19	そうですね。例えば吹奏楽や演奏会があるとか。				
A	20	そうですね。	体育会系に限らない	体育会系に限らない	体育会系に限らない	体育会系に限らない
X	21	何らかの目標と達成とか、何かを成功させることへ目標を持ってやっていくっていうことは大切なことですかね。				
A	22	そうですね。大学だともう自主性に任されることが多いので。	目標設定が大切/大学では自主性に任される	目標設定が大切/大学では自主性に任される	学生の自主性に任される活動	主体的な活動
X	23	多い。ええ。				
A	24	その組織の中で、目標を達成するためにどうしたらいいか。	組織の中/目標を達成するためにどうしたらいいか	組織/戦略立案とアプローチ	組織内での戦略立案とアプローチ	組織内での戦略立案とアプローチ
X	25	ええ。				
A	26	で、特に部活とかだったら、あんまり気の合わないような人もたくさんいる中、それは多分社会へ入ったときにいっぱい経験することなんですか。	特に部活/気の合わないような人もたくさんいる/多分社会へ入ったときにいっぱい経験すること	部活など組織では気の合わないような人もたくさんいる/社会へ入ったときに経験すること	正課外活動/多様な人たちの交流/社会でも求められること	正課外活動/多様な人たちの交流からの学び
X	27	ええ、ええ。				
A	28	いろんな人とどうやって付き合っていくかというところを学ぶいい場所、環境だと思います。	いろんな人とどうやって付き合っていくか/を学ぶいい場所、環境	多様な人達との付き合い方を学ぶ場所と環境	多様な人達との付き合い方を学ぶ機会	多様な人達との付き合い方を学ぶ場

ンスを問われる。やるべきことを洗い出してプライオリティを決める。」ということが「仕事との共通点」になると語っている。このように大学時代のトライアスロン経験は、それにより主体的に仕事ができ、それが社内での評価にも反映し、自己肯定感も高くなるという社会人生活により循環を生みだす原点となっている。

V 総合考察

(1) 仮説『大学時代の体育会活動に主体的に参加している学生は、大学生活を充実させ、就職後においてプロアクティブ行動を積極的に行う』の検証

まず、大学時代のトライアスロン部の活動(②)では、過酷なスポーツを一から始めるにあたり、Aさんは向上心を持ち、目標を明確にして高みを目指し続けることに意義を見出して選択している。そして、トライアスロン部の組織改革(③)を先輩と二人で主体的に進めている。役職を決め責任分担のシステムを導入したりトレーニング内容の改善をしたりして組織を改革して作り上げていった。このような大学時代の部活動の意義(⑨)として、チャレンジして成功する体験を通して、自分を高めていくプロセスを経験していく重要性を挙げている。

次に、就職活動について(⑥)は、就職に際してキャリアセンター等に依存せず自己決定しており、トライアスロンの練習を通して自己分析や自己理解は済ませていた。そして、実際に自分の感覚を信じて今の会社に入社して正しかったと振り返っている。具体的には、自主性、課題解決能力、吸収力、デザイン思考力という力の大切さを挙げ、特に企業に入社以降に必要な能力は主体性だと語る。

入社について(④)は、トライアスロンも仕事も好きなことを基準に選択した。専門が活かせる会社であることと、人生の貴重な時間を長く費やす仕事は、やるなら「おもしろおかしく」したいため、豊かな人生が考慮されている社是や企業理念に共感して入社している。

入社後(⑤)は、希望の部署に配属され、人物評価で積極性やリーダーシップという自分の強みを評価されて、入社3年目で「**多分ここしかないっていうところに僕は入ったと思いますね**」と語るとおり充実した社会人生活を送っている。主体的に企業スポーツに参加(⑦)し、所属での人間関係だけでなく、企業スポーツを通じて社内の仲間とも交友も深め、会社の社会貢献活動にも積極的に関与している。

仕事とトライアスロンとの関係(⑧)については、体育会活動で体力、忍耐力、精神力を培い、特にトライアスロンは3種目競技であるため自己管理が身に付き仕

事に有益であると語っている。社会人生活は充実しており(⑩)、週末は同期と旅行に行くこともある。

以上のとおり、Aさんは一貫して主体的に行動するという「自分の軸」をぶらすことなく、自己の意思決定で行動していることがわかる。「大学生活が充実している学生は、入社後にプロアクティブ行動を行っている(館野, 2016)」というとおり、大学で研究した内容を仕事にして、トライアスロンを通じて自己理解し、自己責任で選択した会社での仕事にも満足している。そして、体育会活動で培った主体性や課題解決能力などは高く評価され仕事に役立っている。館野他(2016)は、「就職後の行動に対して、大学での経験が意義を持つ」と述べているが、本事例もまさしくこのとおりの結果を示している。

(2) 体育会系の「系」からの離脱モデル

仕事に必要な能力(⑥)において、Aさんが「**指導者がいて、もう練習メニューも組まれてて、『おまえ、これ集中してやればいいんだよ』って言われてたら、まあ競技としては強くなれたかもしれないんですけど。そうですね。何かほかの仕事とかに活かせるような取り組みの姿勢とか経験にはならないと思います。**」と語っている。体育会で専門家による練習メニューが用意されてコーチや監督から記録を伸ばし勝つための指導がなされる場合、たしかに競技技術の向上はもちろん、苦しい練習を乗り越えた先には、努力、忍耐力、さらには、仲間との協調性やコミュニケーション能力ももちろん得られるものである。

しかし、一般大学生が大学を卒業して社会人になる場合、上記の組織では、自己が直面する課題に対し臨機応変に対処し、主体的に考えて目の前の課題解決に向けて行動するという力の醸成の機会には成り難い傾向にあることが懸念される。これまでのわが国における体育会運動部活動は、むしろそれこそが上下関係が重視される日本的雇用慣行下で、協調性があり上司の指示に従順に従う特性が好まれ、それが体育会系出身者の強みであった(金森・蛭田, 2018, 2019)。しかし、学生が主体的に組織運営に携わり、それぞれに目の前の課題を自分たちで解決しながら、競技成績を伸ばす工夫をしていくことも加味されるならば、それらに加えてより多くの「新しい能力」(松下, 2014)が醸成される場になるだろう。

つまり、「体育会系所属」ということに意味を見出すのではなく、「体育会の〇〇部所属で、自分は何を目標にどのように主体的に取り組んだのか」ということを、部活動の中で個々人が明確に意識して主体的に取り組むことが必要であり、そういう意味で体育会系の「系」か

らの離脱が必要である。「系」とは「組織だった分類⁽⁶⁾」のことである。体育会等大学における正課外活動は、組織に所属することに価値があるのではなく、「系」から離脱した自律的な個人として、学生の自主的な活動の中で確立することが必要である。協調してチーム力を高めるためにも自立した個の成長を伴う必要があり、これまでのどちらかという集団で捉えられてきた大学における体育会活動の取り組み方を見直す時期にある。

本稿は体育会運動部に焦点を当てて論じているが、金森（2018a）、金森・蛭田（2019）の研究では、体育系のサークルでも文化部・文化系のサークルでも「勉強との両立」についての分析結果からではあるが、これらの所属でも同様に意義があることを示している。これらの点について、東原他（2019）は、「各大学における大学スポーツ・学生アスリートの位置づけ、また彼／彼女らを支援する取り組みや働きかけが、彼／彼女らの卒業後の生活をより良いものにする可能性があることを意味する」と述べていることは重要な視座である。

（３）大学での正課授業と正課外活動のあり方

本研究は、いわゆる一流大学から一部上場企業に入社し、トライアスロンという過酷なスポーツを大学入学後に一から始めて現在まで継続している文武両道のエリートを取り上げている。よってこの分析は一般性や普遍性を有しないという反論が想定される。

たしかに、Aさんは自分で考え主体的に行動し、就職はキャリアセンターなど頼らず部活動を通して自己分析し、自分の直感で会社を決めて専門が活かせる仕事に就いている。職場は理解のある上司といい仲間に恵まれて、会社全体が創業者の社是が実践されている優良企業である。

しかし、これはAさんがエリートだから多くが手に入っているのでは決してない。このような環境を自分の力で獲得したからである。絶えず自分自身を見つめ、自分のやるべきことを頭で考え、それを実践するためにひたすら努力している。それをエリートというのだとさらなる反論が予測されるが、Aさんの大学時代のインタビューでは、精神的に弱いところがあり自分なりに本を読み専門家の意見も聞いて克服していた。また、金森（2016d）においては、やはり水泳で全国大会に軒並み優勝し、中学時代に父親を亡くしながら、勉強と水泳とアルバイトとの両立に涙ぐましい心の葛藤を乗り越えて医師を目指している大学生を分析した。彼らに共通するのは、目の前の困難に負けずに正課授業と体育会活動等にひたむきに取り組んでいる点である。

体育会系に限らず正課外活動と勉強、アルバイト等との両立を図り、主体的に充実した大学生活を送っている

学生の中には、家庭環境、病気、貧困など事情はそれぞれ異なるが何らかの試練を抱えている学生が少なくない。しかし、大学生活を通して自分に負けずさまざまな葛藤を乗り越えようと努力を怠っていない。このような学生は社会に出てもリアリティショックを受けることなく、より一層活躍している。

以上から、大学には単なる学生支援のみならず、大学生活の中で学生一人ひとりが主体的な活動を実践できているのかという個人の意識に応じた支援策を講じることが求められていると考える。本稿は体育会系に焦点を当てて論じているが、金森（2018a）、金森・蛭田（2019）の研究では、体育系のサークルでも文化部及び文化系のサークルでも「勉強との両立」要件は必須であるが、これらの所属でも同様に意義があることを示している。これらの研究を含め、今回の研究を通して見えてきたことは、既に大学が用意している正課授業及び正課外活動のカリキュラムで大学生活は十分充実したものとなるということである。「生きる力、リテラシー、社会人基礎力、学士力、エンプロイアビリティ」などの「新しい能力」に基づいた、改めて用意されたカリキュラムに期待するのではなく、正課授業及び正課外活動をいかに運用していくのかという課題が突きつけられているにすぎない。もっとも、大学における正課外活動は、「学生が自主的に行う活動⁽⁷⁾」であり、大学教育としてどのような関わりを持っていくのかは、大学ごとに検討される必要がある。

VI 結語

本研究の目的は、大学から体育会運動部に所属し大学院博士前期課程修了後就職、現在入社3年目であるAさんにインタビューを実施して質的研究により、大学時代の体育会活動が就職活動及び入社3年目頃までの初期キャリア形成においてどのような影響を与えているかについて、プロアクティブ行動の概念を分析枠組みに据えて明らかにすることにあった。

その結果、Aさんは、まず、浪人生活を経て希望大学に入学した成功体験から向上心を持つことに意義を感じ、体育会トライアスロン部に入部した。部の組織改革に主体的に取り組めなかった組織を作り上げていった。次に、就職活動においては、自己責任で取り組み、専門が活かせる会社を自分で選択して入社した。入社後は、希望の部署に配属され人物評価で積極性やリーダーシップという自分の強みが評価された。さらに企業スポーツ活動にも参加して社内の仲間とも交友も深めながら会社の社会貢献活動にも積極的に関与して、入社3年目の現在、円滑な初期キャリア形成を行い

充実した社会人生活を送っている。

以上のとおり、A さんは一貫して主体的に行動するという自分の軸をぶらすことなく自分の行動を選択しており、プロアクティブ行動、すなわち、組織に能動的に関わる行動ができていた。つまり、「大学時代の体育会活動に主体的に参加している学生は、大学生活を充実させ、就職後においてプロアクティブ行動を積極的に行う」という仮説を実証していた。また、体育会等大学における正課外活動は組織の所属に価値があるのではなく、学生の自主的な活動の中で、「系」から離脱した自律的な個人を確立することが必要であることを提言した。

大学での学びや生活が就職後のプロアクティブ行動に与える影響に関する研究は、近年着目され始めたもので研究の蓄積が少なく、個別具体的な検証はほとんどなされていないところに本稿の意義はある。しかし、本稿は一つの事例にすぎず、今後さまざまなタイプの学生に焦点を当てて研究を進めていく課題が残されている。

大学教育に対してさまざまな改革が進められているが、大学の正課授業及び正課外活動は学生の主体的な実践こそが何より重要である。新たな改革を過度に志向するのではなく、大学自らが蓄積してきた高等教育における正課及び正課外活動を着実にやっていく原点にこそ、大学教育に職業的レリバンスが生まれると考える。

謝辞

A さんには大学院在学時から現在に至るまで本研究に協力して頂いており、厚く感謝いたします。

[注]

- (1) 内閣府 経済をめぐる現状と課題 (2019年12月4日閲覧) (https://www5.cao.go.jp/keizai-shimon/kaigi/special/future/sentaku/s3_2_11.html)
- (2) 日本トライアスロン連合ホームページ (2019年12月8日閲覧) (<http://www.jtu.or.jp/triathlon/>)
- (3) 2019年卒マイナビ大学生就職意識調査 (2019年12月8日閲覧) (http://mcs.mynavi.jp/enq/ishiki/data/ishiki_2019.pdf)
- (4) 東洋経済オンライン 榎本誠二 (2019年12月8日閲覧) 榎本誠二, 40代がなぜ「トライアスロン」で勝てるのか (<https://toyokeizai.net/articles/-/222585>) (2019年12月12日閲覧)
- (5) 労働政策研究・研修機構「若年者の能力開発と職場への定着に関する調査」 (<https://www.jil.go.jp/institute/research/2017/164.html>) (2019年12月12日閲覧)
- (6) 広辞苑第7版. 岩波書店.
- (7) 大学時報「特徴ある正課外教育で学生を教育する」第364

号2015年9月発行.

(<https://daigakujihou.shidaiaren.or.jp/search/?jihopage=17>) (2019年12月22日閲覧)

参考文献

- Atkinson, M., (2008) Triathlon, suffering and exciting significance. *Leisure Studies*. Routledge. 27(2): 165–180.
- 藤田征夫 (2011) 豊かな社会をつくる人生要素. 楠田丘編. 人材社会学.
- 濱口桂一郎 (2013) 日本型雇用システムにおける「教育と労働の密接な無関係」. 日本教育社会学会編. 労働の場のエンパワメント. 東洋館出版社.
- 浜田雄介 (2009) エンデュランススポーツの実践を支え合う「仲間」: トライアスリートの互酬的实践の記述的分析から. *スポーツ社会学研究*. 17 (1): 73–84.
- 橋口昌治 (2006) 若年者の雇用問題と「やりたいこと」言説. *Core ethics*, 2: 165–180.
- 本田由紀 (2004) 高校教育・大学教育のレリバンス. *JGSS 研究論文集*, 3: 29–44.
- 城 繁幸 (2006) 若者はなぜ3年で辞めるのか: 年功序列が奪う日本の未来. 光文社出版. 177–178.
- 金森史枝 (2016a) 「何事もほどほどに」大学生活を送る学生の分析. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (教育科学), 63 (1): 83–93.
- 金森史枝 (2016b) 研究総合大学における体育会運動部の活動意義: 4人の学生アスリートによる語りの分析. *体育社会学専門領域発表論文集*, 24: 19–24.
- 金森史枝 (2016c) 体育会運動部に所属する学生が持つ価値認識. *大学教育学会第38回大会発表要旨集*, 144–145.
- 金森史枝 (2016d) トップレベルの競技維持と学業の克服過程の分析: ある医師を目指す大学生の語りから. *日本高等教育学会第19回大会発表要旨集*, 174–175.
- 金森史枝 (2017a) 産業界が求める人材と現役大学生の特性との乖離の考察: 「何事もほどほどに」大学生活を送るという点に着目して. *社会文化研究*, 19: 129–148.
- 金森史枝 (2017b) 大学時代の体育系正課外活動への参加が社会人生活に及ぼす影響: 体育会運動部と体育系サークルとの所属の違いに着目して. *日本体育学会体育社会学専門領域発表論文集*, 25: 129–134.
- 金森史枝 (2018a) 大学時代の正課外活動における所属の違いが社会人生活の意識に及ぼす影響: 体育会系と文化系との所属の違いに着目して. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (教育科学), 64 (2): 93–105.
- 金森史枝 (2018b) 幼少期から取り組んだ剣道を通して培った力は仕事にいかにか活かされたのか: 大企業の総務担当者としてのメンタルヘルス問題への関わり. *総合保健体育科学*, 41 (1): 31–43.
- 金森史枝・蛭田秀一 (2018) 大学における正課外活動としての体育会運動部活動の意義: 体育会運動部活動を通して何を習得しているのか. *総合保健体育科学*, 41 (1): 45–54.
- 金森史枝・蛭田秀一 (2019) 大学時代の正課外活動が社会人生活に及ぼす影響. *総合保健体育科学*, 42 (1): 7–20.
- 久木元真吾 (2003) 「やりたいこと」という論理: フリーターの語りとその意図せざる帰結. *ソシオロジ*, 48 (2):

- 73-89.
- Le Breton, D., (2000) Playing symbolically with death in extreme sports. *Body & Society*. 6(1): 1-11.
- Maslow, A.H. (1968) Toward a psychology of being. 2nd ed. *Van Nostrand Reinhold Co Inc.*
- ／上田吉一訳, マスロー A.H. (1998). 完全なる人間：魂のめざすもの. 第2版. 誠信書房.
- 松下佳代 (2010) 〈新しい能力〉概念と教育—その背景と系譜. 松下佳代編. 〈新しい能力〉は教育を変えるか. ミネルヴァ書房. 1-42.
- 松下佳代 (2014) 大学から仕事へのトランジションにおける〈新しい能力〉. 高校・大学から仕事へのトランジション. ナカニシヤ出版.
- 大谷尚 (2008) 4ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案：着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 54 (2) : 27-44.
- 大谷尚 (2011) SCAT: Steps for Coding And Theorization : 明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法. 感性工学, 10 (3) : 155-160.
- 大谷尚 (2013) 医療コミュニケーションへのアプローチとしての質的研究手法の機能と意義：これからの医療コミュニケーションに向けて. 篠原出版新社.
- 大谷尚 (2019) 質的研究の考え方：研究方法から SCAT による分析まで. 名古屋大学出版会.
- 小方直幸 (2008) 大学から職業への移行をめぐる日本の文脈. 山内乾史編 (2008). 教育から職業へのトランジション. 東信堂.
- 小川憲彦 (2012) 組織社会化戦術とプロアクティブ行動の相対的影響力：入社1年目従業員の縦断的データからドミナンス分析を用いて. 法政大学イノベーション・マネジメント研究センター. working paper series: 121.
- 齊藤隆志 (2010) 大学スポーツ組織活動を通して獲得する能力に関する一考察：知識基盤社会でもとめられる能力としての「スポーツぢから」概念について. 日本女子体育大学紀要, 40 : 23-32.
- 下村英雄 (2002) フリーターの職業意識とその形成過程：「やりたいこと志向」の虚実. 小杉礼子編. 自由の代償／フリーター. 日本労働研究機構.
- 白戸太郎 (2010) 仕事ができる人はなぜトライアスロンに挑むのか. マガジカハウス.
- 館野泰一 他 (2016) 大学での学び・生活が就職後のプロアクティブ行動に与える影響. 日本教育工学会論文誌, 40 (1) : 1-11.
- 館野泰一 (2016) 職場で主体的に行動できる人は、どのような大学生活をすごしてきたか. 館野泰一・中原淳編. アクティブトランジション. 三省堂.
- 束原文郎 他 (2019) 学生アスリートにおける学業と競技の両立意識の実態とその背景. スポーツ産業学研究, 29(4) : 281-291.
- 山田昌弘 (2002) フリーターの置かれている現状と将来展望. 労働の科学, 57 (2) : 15-18.
- 保田江美・溝上慎一 (2014) 初期キャリア以降の探求：「大学時代のキャリア見通し」と「企業におけるキャリアとパフォーマンス」を中心に. 中原淳・溝上慎一編. 活躍する組織人の探求：大学から企業へのトランジション. 東京大学出版会.